

2012年2月

一般演題

419(S-293)

P1-2-5 子宮体部 type2 体癌に関する臨床病理学検討

東海大

飯田哲士, 村上 優, 村松俊成, 三上幹男

【目的】子宮体部悪性腫瘍は、type1 および type2 に区分され、後者は発生頻度が低く、予後不良な組織型からなるのはよく知られた事実である。これらの予後の差異は、薬剤感受性によるところが大きいと思われるが、その性質の違いは、免疫組織学的検討により推測することができる。これらを検討することにより、予後不良な組織型を呈する子宮体癌に対する治療戦略を模索することを目的とする。**【方法】**これまで当施設で、治療前にインフォームドコンセントが得られ、手術をおこなった子宮体部漿液性腺癌、明細胞腺癌、および類内膜腺癌G3の各々について、子宮内膜の増殖と悪性化に関与するといわれるER、p53、Cerb-B2の発現に着目し、これらを免疫組織化学的に検討した。**【成績】**type2の子宮体癌においては、これらのマーカーは比較的高頻度に発現した。これは、type1の症例とは異なる傾向であった。**【結論】**こうした事から、予後不良の組織型を呈する子宮体癌については、免疫組織学的検査を補助的に追加することにより、個々の症例での薬剤感受性や生命予後を推測する一助となる可能性が示された。さらには、これらの所見を治療応用につなげていく事に関して、今後さらなる検討を要すると思われた。

P1-2-6 子宮体癌における N-acetylgalactosaminyltransferase-6 発現の意義産業医大¹, 産業医大分子生物学²栗田智子¹, 鏡 誠治¹, 卜部理恵¹, 川越俊典¹, 松浦祐介¹, 蜂須賀徹¹, 和泉弘人², 河野公俊²

【目的】糖鎖分子構造の決定に関わる糖転移酵素の中で、N-acetylgalactosaminyltransferase-6 (GalNAc-T6) は細胞接着分子や細胞外基質分解酵素の糖鎖修飾により、癌の転移や浸潤に関与することが報告されている。今回我々は子宮体癌におけるGalNAc-T6の発現について、臨床組織学的リスク因子との関係を検討した。**【方法】**1990年1月から2007年12月までに当科で経験した初回子宮体癌245例を対象とした。パラフィン包埋切片を用いてGalNAc-T6ポリクローナル抗体と反応させ、EnVisoin Dual Link Systemで発色させた。GalNAc-T6の発現を4段階で(-, ±, +, ++)評価し、-と±を陰性、+と++を陽性とした。子宮体癌を類内膜腺癌と非類内膜腺癌の群に分け、GalNAc-T6の発現を検討した。また類内膜腺癌群においてはGalNAc-T6の発現と病期、組織学的分化度、骨盤リンパ節転移、筋層浸潤、脈管侵襲、頸管浸潤、付属器転移についてMann-Whitney U-testを行い、予後との相関をKaplan-Meier法を用いて単変量解析で評価した。本研究は当院倫理委員会の承認を得ている。**【成績】**類内膜腺癌群205例においてGalNAc-T6の陽性群は150例、陰性群は55例、非類内膜腺癌群40例においてはGalNAc-T6の陽性群は19例、陰性群は21例で、有意に類内膜腺癌群に高発現していた($p=0.0013$)。また類内膜腺癌群においてGalNAc-T6の発現は進行期($p=0.049$)、分化度($p=0.001$)、筋層浸潤($p=0.024$)、骨盤内リンパ節転移($p=0.034$)と有意な関連があった。単変量解析では累積10年生存率は陽性群90.7%、陰性群77.6%であり、有意差はなかった($p=0.081$)。**【結論】**GalNAc-T6は子宮体部類内膜腺癌において、浸潤・転移との関連が示唆された。

P1-2-7 子宮体部癌肉腫における EGFR および HER2 発現：組織マイクロアレイを用いた検討京都府立医大¹, 国立がん研究センター中央病院病理科・臨床検査科², 国立がん研究センター中央病院婦人腫瘍科³
澤田守男¹, 津田 均², 笠松高弘³, 北脇 城¹

【目的】子宮体部癌肉腫は様々の治療に抵抗性で、予後が極めて悪い疾患である。その発生においては、上皮・間葉成分共に单一の上皮性悪性腫瘍細胞から発生するという single cell theory が主流である。既に我々は、子宮体部癌肉腫においてEGFRやHER2などの発現パターンが上皮・間葉成分で異なることを示してきた。本研究は、子宮体部癌肉腫の多数例を用いた組織マイクロアレイ (TMA) でEGFRおよびHER2発現についての網羅的検索を行い、子宮体部癌肉腫診療における分子標的マーカーとなり得るかどうか検討した。**【方法】**対象は、1997～2010年に治療を行った子宮体部癌肉腫症例55例。学内倫理委員会の承認を得て、手術切除標本のパラフィン包埋ブロックから上皮成分と間葉成分のコンポーネント別にTMAを作製。それを薄切して、EGFRとHER2タンパク発現を免疫組織化学的に検討した。**【成績】**上皮成分のうちEGFRが+2以上の発現を示したのは、類内膜腺癌ではG1で18.2%, G2で33.3%, G3で75.9%であり、グレードの上昇と共に発現が増強する傾向にあった。また、漿液性腺癌では37.5%であった。肉腫成分におけるEGFR陽性例は73.1% (+1が17.9%, +2が25.6%, +3が29.5%)であり、肉腫成分ではEGFRタンパクの過剰発現傾向があることが示唆された。HER2に関して+2以上の発現を示した部分はなかった。**【結論】**TMAを用いた本検討では、間葉成分でEGFRの強発現が高頻度に認められ、上皮成分においては悪性度が高くなるほどEGFR発現が増強する可能性が示された。一方、HER2の発現は本検討ではほとんど認められなかった。以上より、子宮体部癌肉腫においてEGFRが診断や治療の分子マーカーとなる可能性が示唆された。